

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆
小林国二・小林善秋・高橋潔・室賀清輝
高橋利春・屋代健・飯泉隆史
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社



ご家族の皆さままでご覧ください

「山に入ると山見ええず」

翠巖 弘

上の写真は長岡まつりの大花火大会のもので、平和を願う慰霊の花火「白菊」、中越大震災の翌年から人々を勇気付け、復興を祈願して打ち上げられている「フェニックス」をはじめ、多くの花火は人々に感動・思い出・元気を与えてくれております。私も毎年、お客様を案内しての花火見物が楽しみであり、翌日から活力の源になっております。

師匠であり父親でもあった前住は、生前中よく「山に入ると山見ええず」と言われておりました。私には何故か花火を観るたびに師匠を思い出します。師匠は花火が大好きで、毎年花火の音が聞こえてくと、母と一緒に信濃川の土手まで行かれておりました。

私も花火は色々の場所で観る機会がありました。が、屋形船で観た時は花火が真上に上がり、音響共に迫力がありますが、見えにくい。土手の下では船からほどではないが、全体が見えにくく、土手の上や桟敷で観ると迫力もあり、全体も見やすい。だんくんと離れた所で観ると全体が見やすいが迫力が欠けてきます。

山も遠くから観ると絵画のように見え、近づいていくと目前に山が雄々しく迫り、山中に入ると雑木林、茫々たる草や、山肌だけが目に入り、山は見えません。

師匠は明治生まれ。明治の代表のような人で、人様には優しく、自分自身は当然、家族も自分に準じる存在と大変厳しく、

高校生ぐらいまでは大変怖い存在でした。生前中は、山の中に入ると同じように厳しさだけを強く感じ、時代が違う・価値観・考え方も違うと反発の思いが多々あり、人間の生き方・力量・信念・素晴らしさ等々、観えないことが多くありました。

遷化され、一周忌、参回忌の頃は山を真近で観る、花火を土手下で観る感じ、七回忌、十三回忌の頃になると、桟敷で花火を観るように、山の雄々しい全体が観えるように感じ、とても追いつくことができない、師匠の雄大さを感じ入りました。

花火を観るたびに、現代は他人に厳しく自分に優しい人が多い中、自分に厳しく他人に優しい生き方をされた師匠を思い出します。

晋山式を終えて

雲洞庵新命 四十七世住職 田宮隆児



今年の五月二十二日、柔らかな初夏の日差しが降り注ぐなか、南魚沼市の雲洞庵にて第四十七世の住職就任式となる晋山式をつとめさせていただきました。晋山とは「山に晋む」とも読めますが、新命住職の就任にあたり、古来より曹洞宗寺院ではとても大切にされてきた儀式です。

雲洞庵の歴史は約一三〇〇年前の奈良時代にまでさかのぼるお寺です。元のお寺は尼僧院であったと伝えられていますが、約六百年前の室町時代に関東管領上杉家の菩提寺として再興されました。曹洞宗寺院として再興された雲洞庵はその後、村上の耕雲寺、村松の慈光寺、弥彦の種月寺と合わせて「越後四箇道場」と呼ばれるようになりました。

現在の雲洞庵は雲水の修行する道場ではありませんが、年間を通して大勢の参拝客が訪れる、歴史の重みを感じさせるお寺です。

雲洞庵では三十一年ぶりに行われた晋山式ですが、先代ご住職もお乗りになられたお籠を使わせていただき、大勢のお檀家さん、信者さんに見守



られながら、ゆつくりと参道を上り山門へと向かわせていただきました。山門到着後は雲洞庵末寺ご寺院の方丈様方にお迎えをいただき。その後坐禅堂、本堂、開山堂を回り肅々と行事は進められました。

場をあらためた後に、本堂にて晋山式のハイライトとも言える晋山開堂という儀式が行われました。新命住職が須弥壇上に上がり、志を述べた後に問答を交わします。この問答は台本が用意され

ておらず、ぶっつけ本番のやりとりですので、問答をかける側と受ける側の真剣勝負です。

また、晋山式においては「白槌師」と申して、儀式の見届け人ともいってお役がありますが、式の最後はこの白槌師をおつとめいただきました大本山總持寺副貫首石附老師のお言葉によって晋山式は締めくくられました。

この度の晋山式にあたりましては準備の段階より安善寺方丈様には何度も南魚沼までお越しいただきました。また当日は真弘若方丈様には五侍者（新命住職の身近にてお手伝いいただく五人の僧侶）の一人としてお手伝いをいただきました。

雲洞庵は安善寺様とは数世代に渡り大変深いお付き合いがあります。今後もこの縁を大切に、私も雲洞庵の住職としての責任を果たしてゆきたいと思っております。

【日々精進(三十四)】

寄り添い、支えあいながら生きる

近藤 真弘



つたドジョウを食べるわけにはいかず、ホームセンターでケースを購入し飼うことにいたしました。結局は食べようと思ったドジョウに朝晩エサをあげるのが私の仕事になってしまいました。

お寺の本堂にも貼ってありますが、毎年曹洞宗では管長のおことばとして「告諭」を出しております。今年はその中で道元

禅師様の教えの「同事(どうじ)」をとあげています。この「同事」という言葉は修証義の第四章「発願利生」のなかに四つの教え「布施」、「愛語」、「利行」と共にでてまいります。

「告諭」のなかで「一人ひとりの悲しみや苦しみを受け止めあい、支えあう同悲・同苦の生き方であり、すべての人や物との間

に垣根を作らない和合の生き方です。」と同事の教えを説かれています。

我々は生きている間に様々な出会いがあり、多くの人たちとかわりを持つて生きていきます。この世に生まれ、生きていく中でその人生をたった一人きりで終える方は誰もいません。家族であつたり、

学友であつたり、職場の間であつたり、人との繋がりには数多くあります。

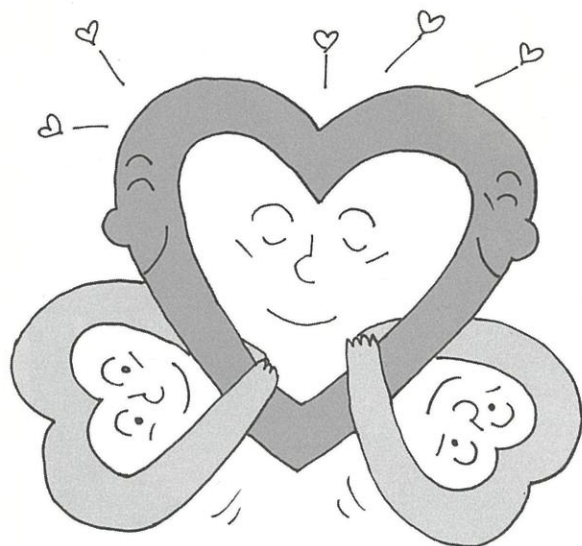
修証義では同事についてさらにこのように説かれていきます。「海の水を辞せざるは同事なり、このゆえに、よく水あつまりて海となるなり」と。海はとても大きなものです。この海は多くの川や天から降り注ぐ雨、これらのものを拒むことなく受け入れます。故に、大海と呼ばれる大きなものが作り上げられるのです。

この拒むことなく受け入れることこそ、同事そのものです。我々が生きていく中で出会う多くの人たち、皆が、皆同じ考えや、価値観を持っているわけでは当然ありません。

ドジョウの話の一つでも食べるのか、飼うのか。同じものに対しての考え方が違うことは多々あります。そんな中で自分とは合わない、この人とは付き合いたくないと、排除することは簡単です。しかし、私たちにはそれぞれ感情があり、考え知恵を生むことができます。

相手のことを考え、そこに自分を合わせることができます。相手の悲しみや、苦しみに気付くことができます。そうすればすべてを受け入れることができるのではないのでしょうか。

すべての人に寄り添い、支えあう、同事の生き方を歩んでいきたいと思えます。



曹洞宗の「葬儀」とは 家族葬について思うこと

龍淵寺住職 石田純道

檀信徒の皆様の葬儀を

勤めさせていただくようになって二十近くが経ちました。この二十年の間、葬儀の形も変わってまいりました。特に昨今言われるようになったのが「家族葬」です。テレビ番組などの特集では大きく「家族葬」が取り上げられます。

家族葬の意味を考えれば、残された家族が故人への深い想いを込めた葬儀ということになるのでしょうか。しかし、家族葬の形となると各家で違います。本当に家族数人だけの家族葬。親戚を含めた大きな意味での家族葬。隣組や知り合いを含めた、もはや家族葬とは言えないであろう家族葬。本当にたくさん形の家族葬が

あります。

多くの家族葬に立ち会って思うことは、「家族葬」という言葉に一般的な概念がまだ確立されていないということ。確立されていないのに言葉だけが独り歩きしている現状があるのです。もし何かあった時に「家族葬」を選択しようとしている方もいらつしやるのではないのでしょうか。



そこで「葬儀」の意味を改めて考えてみたいと思います。二つ目の意味は、葬儀は「縁」を改めて考える機会です。仏教が故人を送る葬儀をする意味はここにあり、言っても過言ではないと思います。お釈迦様は「縁起の法」を悟られました。それは、私たちは多くの人々の縁の中でしか生

います。葬儀には二つの意味があると思います。まず一つ目は、故人とお別れの儀式という意味です。生前は家族であった故人を仏様としてお参りしていく。そのための儀式が曹洞宗の葬儀です。故人を先祖の一人として敬いお参りし、私たち子孫を見守ってください存在になるのです。



きられないということ。故人がいなければ「私」はここにはいません。また、親戚との付き合いも間違いなくなかったはず。故人が一生の中で結んできたその縁を、残された遺族が引き継ぎ、大切に生きることが、故人への恩に報いることであり、その生き方が私たちを幸せへと導いてくれるものと私は信じています。家族葬を否定するつもりはありません。積極的に選択される方、またそうせざるを得ない方もいることと思います。ただ、遺族の知らない故人の恩を感じている方も少なからずいらつしやるのです。

最近よく耳にするのが

「〇〇さん亡くなつてたんですね。お世話になったんですよ。お顔を見てお別れしたかったんです。が知らなくて……」。また、「〇〇さんの葬儀「家族葬」と聞いたんですが、参列してもいいのでしょうか」。そんなことを聞かれることがあります。そのような方々が参列できる葬儀、縁ある人が最後のお別れをきちんとできる葬儀を是非行つて欲しいと心から願っています。

三年前、私の母の葬儀を行いました。多くの方が参列してくださいました。その際、母との思い出を涙ながらに話してくださいました。その方の話から、私の知らない母の姿を聞くことができて、大変有難かったことを今でも忘れません。故人との縁をつなぐ葬儀、縁ある葬儀を是非行つていただきたくお願い申し上げます。

お墓の持つ力



吉田 竹史

こんにちは！ お世話になります。吉運堂の吉田竹史と申します。よろしくお願いいたします。

さて、四年に一度のオリンピックピックも後半になってきました。(これを書いてい

るのは八月の中旬) 今回も多く日本人選手の活躍があり、私もたくさん感動をいただいています。

体操や競泳の活躍も素晴らしいですが、特に印象に残っているのが、前

回のロンドン大会で金メダルを一つも取れず、メダル四つで惨敗した男子柔道の活躍です。

金メダル二つ、銅メダル四つと、すべての階級でメダルを獲得するという日本柔道の快挙となりました。柔道日本の復活を託された皆さんのプレッシャーは想像もつきませんが、選手はもちろんコーチの方々を含めた関係者全員の四年間の精進のたまものであると思います。

ロンドン大会の惨敗から立て直しを任されたのが、日本代表監督の井上康生さんです。その井上さんを紹介する記事の中で、亡きお母様のお墓参りの話を書かれていたので紹介します。

井上康生さんは小中高大のすべてで日本一となり、シドニー五輪では金メダルを獲得しました。そのお母さんが康生さんに宛てた最後の手紙の文



末に「すべて初心に帰って頑張ってください」という言葉があったそうです。記事の中で康生さんは「墓参りに行けば、母が教えてくれた『初心』を思い出す。監督になつてなおさら、その言葉の重みがわかってきた」と述べています。これまで多くの試練と苦悩を乗り越えてきた背景には、お墓の前で亡きお母様と対峙することで奮い立たせてきた強い精神力もあつ

たことと思います。また、多くのメダリストたちは「支えてくれた家族やコーチのおかげです」と感謝の言葉を述べています。「感謝の心は人間を成長させていく原動力だと思う」と言ったのは野村克也さんです。感謝の心を思い起こし、強靱な精神力へと導いてくれる。お墓参りでお母様や御先祖様に感謝することもお墓の持つ力だと思っています。

旅立ち

(平成廿八年七月～八月末日まで)

竹田 コウ様 七月五日寂

長岡市新保

諸橋 文子様 七月六日寂

長岡市中沢町

梶 トイ様 七月卅一日寂

長岡市宮内

坂内 ふみ様 八月十七日寂

長岡市鉢伏

白井 克之様 八月廿八日寂

長岡市深沢

ご冥福をお祈りします。



「正法眼」

郷 保治

私たち日頃毎日の生活の中で、何気なく生活しているなかで、皆さん何のこだわりもなく、自分の生き方は自分で決めている、そして目標・目的を作ってそれに向かってどうすればそれが実現するか？ などとなしなしの頭を巡らして少しでも幸せと思える方向を目指



して奮闘しています。当然で当たり前のことですね。それらのために、時にはいろんな犠牲を伴ったリ、利己的にふるまったりしています。

つまり、それが得か損か、あるいは大きいか小さいかとか、全部が一部か、善か悪か、などなど、判断の基準が二者択一の世界

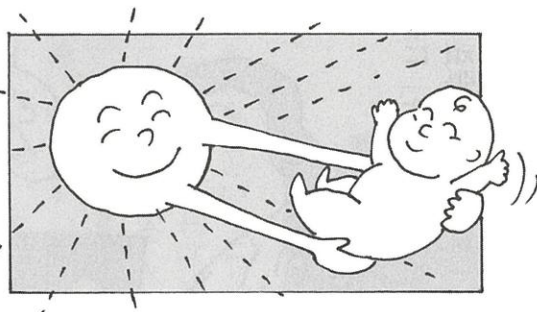
が多いのではないのでしょうか。いつもいつも頭の思考を最大限活用し、繁栄を目指しています。

私はある時、「郷さんあなたの子供はあなたが作った子ではないんですよ」と教わりましたが、意味がよく分かりませんでした。しかし、よく話しを聞いていきますと、こんな風に説明されました。「子供は天地自然の大きな仕組みの中で誕生するもので、お前が一発いい気持ちになった位でお前が作ったような気になるな！」「母親のおなかの中で十日、眼が出来鼻が出来、髪の毛一本一本が出来ていく、両親がそれを一つひとつ作ったのですか？何か貴方の意思がそこに反映されたのですか？」「もしあなたの意思や思考が反映させることができるのなら、もつと頭のいい子をお産みになったでしょう？」つまり、私たちは何一つそこに係るこ

とが出来ないのです。

大宇宙・大自然のルール・仕組みの中でしか私たちの生活は成り立たないという根本的な原理原則を忘れているということです。

自然は否応無しです。そこに理屈はありません。今一歩踏み込んで考えてみますと、人間とてその



大きなルールの中で生かされているのです。ここに気づかないと全てがうまく進まないような気がいたします。



人間はそれぞれ幸せになりたいと思つて頭で考えてもつともつとです、より早く、より高く、より最高にです。しかし、そのことが間違いだとは申しませんし、文明が発展し生活が便利になつていくには必要なことです。そこには幾通りもの幸せも生まれます。

しかし、いかがでしょう？ うっかりすると自分の頭の考えが正しく、他を受け容れなくなつてしまつたり、足るをわきまえなかつたりしてしまします。判断を躊躇したら、そこで大きく深

呼吸をする、そして自分の命の大元に思いをはせる。自分が二十四時間、三百六十五日呼吸によって生かされていることを再認識いたしましょう。小さな悩みは消え失せ、「任運自在」の世界を味わいましょう。大自然のルールに立ち返つて物事を見・判断をする「天・地・人」ということがあります。天の時、地の理、人の和、は大自然の仕組みの中でこそ大きな意味を持つものでしょう。あくまでもそれを生かす眼こそが「正法眼」と言つていいのではないかと思うのです。

副住職通信

テレビ番組で 坐禅紹介

毎週火曜日に行っているお寺の坐禅会に地元ケーブルテレビのリポーターが体験参加をした様子が放映されました。十分

程の放映時間で坐禅説明の様子や、参加者のインタビューなど坐禅のことを多くの方に知っていただくことができたと思います。坐禅会や坐禅にご興味のある方はいつでもお寺にお尋ねください。



焼き芋のご案内

子供のころ庭で落ち葉を集め、たき火をして焼き芋を焼いた。そんな思い出を持つ方もたくさんおられると思います。童謡にもある「たき火」。近年では詩は流れてもたき火を実際に行っている風景を見ることがなくなりました。この度お寺では子供を対象に落ち葉で焼き

芋を企画いたしました。参加費は無料で、参加者で落ち葉を掃き、たき火をして焼き芋を焼くイベントです。古くからの日本の秋の行持に多くの方の参加をお待ちしております。詳しくは副住職にお尋ねください。尚、落ち葉を燃やすに際し、消防署への届け出をいたしました。

子供坐禅会のご報告

地元の曹洞宗の青年会「長生会」では毎年小学生の子供を対象とした坐禅会を行っています。

今年も七月の下旬に出雲崎にある光照寺様を会場に、数十人の子供たちが参加して行われました。真剣な坐禅や体験学習の

腕輪数珠作り、皆で協力した食事の準備や後片付け、海水浴など一泊二日の日程で充実した二日間を過ごしてもらえたと思います。この行持は来年以降も七月下旬に毎年行います。お子さん、お孫さん、知り合いのお子さんなど、ご参加いただければ幸いです。詳しい内容は副住職にお尋ねください。



ボブの独り言

蟬から虫へ、そしてお経？

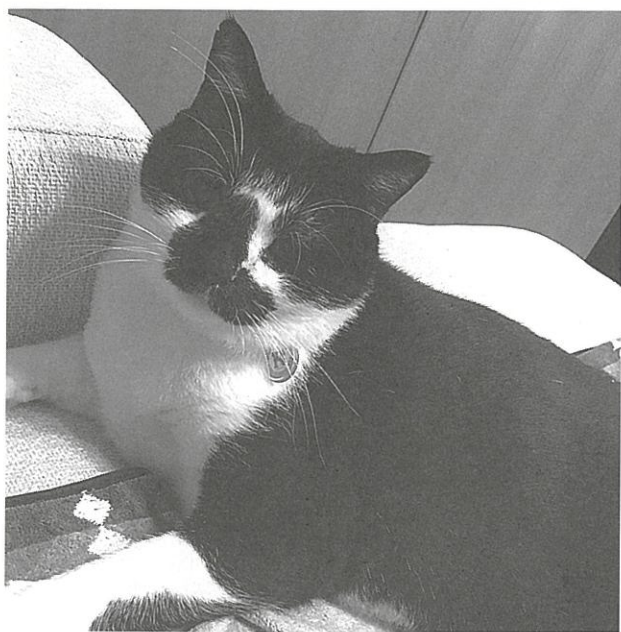
ボブの独り言

本当に暑い夏でした。

新潟が最高気温なんて言われる日もあったくらいですから、大きな木々が多いので、普段は街中では見られない「オニヤマ」が家の中にはいつてきたり、玄關脇には常に「ウスバカゲロウ」が飛んでいたり、困ったのはス

ズメ蜂の多いこと…。

もう何年も前に「公園で遊んでいる子供達を見ながら…」なんて思ってた「犬猫のお墓」。最近では、公園で遊ぶ子もいなくなり、木々が茂って暗い場所で、夏は蚊が多くてお参りも大変ということ、明るい場所



に移転することになったそうです。その工事を阻んだのが「スズメ蜂」。

今は、簡単に本当に良いものがあるんですね！ホームセンターに行つて「蜂退治」なるものを買つて来てあちこちに設置、数日すると良い匂いが漂ってくるのです。それに誘われて中に入った蜂は出て来れなくなるんだそうです。あちこち設置して、かかったスズメ蜂は、およそ五十匹位？ もつとかな？ この数のスズメ

蜂が境内を飛んでいたと思うとぞろっとします。お墓をお参りに来られた人たちが何事もなくて良かったです。以前、ばーばも刺されたことがあるのでスズメ蜂は、一度刺されたことがある人は気をつけなければならぬ

そうです。

そんな中、無事に「犬猫のお墓」を新しい所に移転し、九月五日に以前から埋葬されていたお骨も移して無事開眼も終わりました。私とモモちゃんも入るお墓、明るい場所でお参りに来られる人々が良く見えるので、嬉しいです。気がついたら蟬の鳴き声も全く聞かれなくなり、夜になると賑やかに虫の音が聞こえるようになりました。

聞こえると言うのと、可愛い声でお経？ の練習をしている真人君の声が聞こえてくるようになりました。何かあるのでしょうか？ 楽しみです。

ニヤーン

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職が答えします）など。
- 嬉しい・楽しい／嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

編集 雑感

もうすぐ秋のお彼岸です。彼岸とは昼と夜の時間が同じ、つまり太陽が真東から昇り真西に沈む時期。遠い西方にあるという極楽浄土に想いを馳せ、祖先を供養する行事です。「暑さ寒さも彼岸まで」と云われるように、あの熱かった夏から秋へとシフトしてゆきます。

「ひがん」にはもう一つ「悲願」という文字があります。これも仏教用語で「菩薩が慈悲の心から人々を救おうと立てた誓い」ということから「是非とも成し遂げたいと思う悲壮な願い」という使い方になったようです。

本人選手の活躍は目を見張るものがありました。誰もが期待したメダルをその通り獲得した選手。残念ながら逃してしまつた選手。今まで手にしたことのない悲願のメダルをようやく手にした選手。成果を出せず次の東京大会へ期待を繋げた選手。悲壮な願いで悲願を成し遂げた選手には大いに賞賛を贈りたいと思います。そして成果が出せなかった選手もそこに行くまでの道のりは、壮絶な努力があつたはずで、その選手にも賞賛を贈りたいと思います。

安善寺の龍弘方丈様はまだまだ健在ですが若方丈様も既に立派に活躍され、徐々に世代交代をされていくことでしょう。一八年も続く編集委員会も世代交代を進めてゆかなければと思つていたところ、ここで若いメンバーがまた一人入ってくれました。飯泉隆史さんといひます。小林編集長の悲願が少しずつかないます。

高橋 潔